

笑顔が見れるその日まで

沖縄尚学高校附属中学校 3年 下地 冨弥

「おじいもあと一度だけでいいから孫の顔を見たいさあ。」

祖父はしわくちな笑顔で私に言った。

私の祖父は、網膜色素変性症という難病を抱えている。四千人から八千人の一人にかかる病気で治療法もまだ見つかっておらず、一生治らない病気とされている。しかし、祖父は少しでも病気を治したいと思い毎日薬を飲み続ける。また、手術も数えきれないほど受けてきた。私には考えられなかった。治ると保障されていないのに目薬を何滴もさしたり、目という大切な体の一部にメスを何度も入れなければならないことも。私だったら恐怖でたまらないだろう。しかし、祖父は目が見えないという弱点が少しあるだけで、気持ちや体格は誰よりも強い。そして何よりもとっても優しいのだ。そんな祖父の姿が私にとって幼い頃からの憧れの人である。しかし、私は祖父に対して一つの疑問を持っていた。

祖父は裕福なわけでもなく、宮古島の田舎でおばあといひおばあといと幸せに暮らしている。祖父はある程度の農作業は出来るが、仕事はしていない。しかし、一回の手術のお金は何百万円。そして、毎日の薬の代金を考えると膨大な金額になるだろう。なのに、なぜ祖父は手術を受け、毎日薬を飲めるのだろうか。私は祖父の病気に初めて触れた。これまでは、祖父が病気のこと聞かれると嫌がったり嫌な思いをさせてしまうと思っていたからだ。しかし、祖父に病気のことを聞くと嫌がらず、自分の病気について話してくれた。祖父によると手術や薬は国の税金から補助されていると説明してくれた。祖父は税金に助けられているから希望を持てると思う。他にも、死ぬまで真っ黒な景色では無い。それは、国民一人一人が納めてくれる税金によって手術が受けられるからだ。

私は祖父からの話を聞き、税金へのイメージが 180 度変わった。今までの私は、税金とは聞くだけでもネガティブなイメージを持つ人や率先して払いたいという人はまずいないと思っていた。今までは私もその一人だった。けれど今はもう違う。税金があるからこそ、祖父の目にも少しの希望が持てる。税金は人々に希望をあたえ、助けてくれる。他にも税金は違う形になって人々に恩恵をもたらす。私はこの作文を書くにあたって祖父の病気についても税金の使い道についても今まで何も知らなかったが、学ぶことが出来た。この作文がきっかけに税金についてもっと学びたいと思った。そして、私達一人一人が納めている税金によって手術を受けられることで、祖父はもちろん他にも病気で困っている人達にも生きる糧になると思う。税金によって病気の方々により良い手術が受けられることを願っている。私は祖父に伝えたい。

「おじい大丈夫絶対治るよ。その時は、私の笑顔をおじい目で見せてね。」